小式部内侍小考

――宇治拾遺物語所収説話を手懸かりにして――

能城敦子

1

鎌倉時代の初期に書かれた『無名草子』の作者は、教養深い女性という設定の作中人物に次のような意見を述べさせている。[1]

小式部の内侍こそ誰よりもいとめでたけれ。かかる例を聞くにつけても、命短かりけるさへ、いみじくこそおぼゆれ。

さばかりの君に、とりわきおぼし時めかされ奉りて、亡き跡までも御衣など賜はせけむほど、宮仕への本意、これにはいかが過ぎむと思ふ。果報さへいと思ふやうに侍りかし。

よろづの人の心を尽くしけむ、妬げにもてなして、大二条殿にいみじく思はれ奉りて、やむごとなき僧の子ども生み置きて隠れにけむこそ、いみじくめでたけれ。

『無名草子』では、小式部内侍について、上東門院という立派な主人に可愛がられ、大二条殿（教通）に深く愛され、子までもうけたことを述べ、また、歌人としての才能を賛美している。さらに、二十代後半で亡くなった小式部内侍の薄命を惜しむどころか、「かかる例（清少納言のように、なまじ長く生きてみじめな晩年を送った例）」と比較して、かえって小式部内侍が短命であったことまでもが彼女のすばらしさを助長させる要因としてとりあげられているのである。[2]

また、『宝物集』によると、

上東門院ノ女房ニ、小式部ノ内侍トテ、イミジクトキメキテ、ヨロヅノ人ノ心ヲツクス物アリケリ。ミメカタチキラ、カニ、心ザマツキ〴〵シクアルメカシカリケレバ、院モイトヲシキ物ニヲボシメシケリ。

とあり、ここでも小式部内侍がもてはやされるべき人物として語られている。和歌の才能と、端麗な容姿はやはり母親譲りであったのだろうか。

『無名草子』と『宝物集』のいずれにも見られる「いみじく」という言葉に、小式部内侍の素晴らしさが凝縮されているように思う。一方は、その生きざまに対しての評価であり、またもう一方は、いかに愛されたかということである。

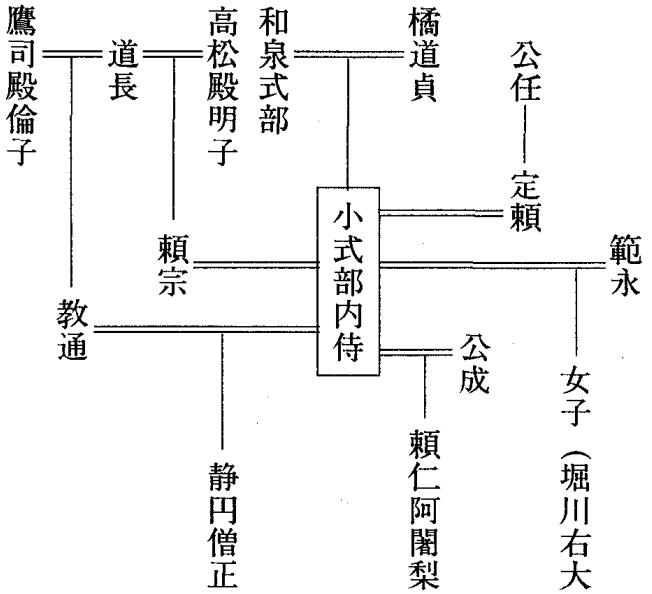
ところで、この恋愛の様子を断片的に示すものとして、『和泉式部集』があり、また、『後拾遺和歌集』第十六雑二にも詞書、歌ともに同じくして出ている。[3] 今、『後拾遺和歌集』によって示すと、次のとおりである。

小式部内侍のもとに二条前太政大臣はじめて
まかりぬと聞きてつかはしける　堀川右大臣
人知らでねたさもねたしむらさきのねずりの衣うはぎに
を着ん
返し　和泉式部
ぬれぎぬと人にはいはむむらさきのねずりの衣うはぎな
りとも

この詞書によって、堀川右大臣頼宗と教通が共に小式部内侍のもとへ通っていたことは明らかである。

和泉式部が華やかな恋愛関係を持っていたことは周知のとおりだが、娘の小式部内侍も、『尊卑分脈』に見えるだけでも五人の男性との婚姻関係を認めることができる（関係系図参照）。そして、この華やかな恋愛の様相が、彼女の登場する説話に複雑な陰影を投げかけているのだろう。

関係系図



2

『宇治拾遺物語』には、小式部内侍のエピソードを伝える話が二つ見られる。一つは、第三五話「小式部内侍、定頼卿ノ経ニメデタル事」でり、もう一つは、第八一話「大二条殿

ニ小式部内侍、奉歌読懸事」である。この二つのエピソードには、いずれも小式部内侍の恋人として知られる教通が登場している。このうち、第三五話は『古事談』との共通話である。今この二つを引用してみる。[4]

堀川右府ハ依二四條中納言一談レ経致二錬磨一。有元都云々。上東門院有二好色女房一。或説小式部内侍云々。堀川右府與二四条中納言一共愛二此女一。然間或時右府先入二件女房局一。已以懐包。其後納言于レ時頭弁云々。伺二件局一之處。已知二會合之由一。納言讃二方便品一歸了。女聞二其聲一不レ堪二感歎一。背二右府一啼泣。兼相枕亦霑兼相籠思。万事不レ可レ劣二定頼一。不レ安之事也云々。因レ之忽發心被レ覺二悟八軸一云々。（古事談）

今は昔、小式部内侍に、定頼中納言、物いひわたりけり。それに又、時の関白かよひ給けり。局に入て、臥し給たりけるを知らざりけるにや、中納言より来て、たゝきけるを、局の人、「かく」とやいひたりけん、沓をはきて、行けるが、すこしあゆみのきて、経をはたとうちあげて、よみたりけり。二声ばかりまでは、小式部内侍、きと耳をたつるやうにしければ、此入て臥し給へる人、あやしとおぼしける程に、すこし声遠うなるやうにて、四声五声ばかり、ゆきもやらで、よみたりける時、「う」といひて、うしろ様にこそ、臥しかへりたりけれ。

この人臥し給へる人の「さばかり、たへがたう、はづかしかりし事こそ、なかりしか」と、後に、の給ひけるとかや。（宇治拾遺物語）

『古事談』と『宇治拾遺物語』は、内容の共通した話がこの他にも随所に見られる。しかし、この話には、大きな異同がある。小式部内侍のもとに通って来て共に過ごしていた人物は『古事談』では「堀川右府」すなわち頼宗である。しかし、『宇治拾遺物語』では、頼宗の弟に当たる「時の関白」教通となっている。また、『古事談』では、頼宗が定頼と日頃から経を談義し合って練磨していたということがあえて述べられている。このような異同には大きな意味が含まれていると思われる。定頼が訪ねた時に先客がいて、ある時は頼宗、またある時は教通という、この二つのエピソードがそれぞれ別の日の出来事を扱っているということは考えにくい。

『古事談』が『宇治拾遺物語』の典拠の一つであることは益田勝実氏以来ほぼ定説化しているようなので、[5]『宇治拾遺物語』の編者は『古事談』の説話を承知のうえで、それとは異なる説話を収録したということになる。

『宇治拾遺物語』がそうしたことをする理由として、『宇治拾遺物語』に登場する人物の中に、藤原南家貞嗣流の周辺に位置する人物（直接にこの家の人物というのではなくとも）が多いこと、また、それらの人物の登場する話が、『宇治拾遺物語』の中の著名人の説話のかなりの部分を占めていることから、編者として南家貞嗣流の経範が有力であることが、薗部幹生氏によって指摘されている。[6]教通はこの家の人物ではないが、この経範の先祖能通が、『古事談』第二臣節十一

話や、『今鏡』に教通の後見として登場しているので、能通は、教通から直接このエピソードを聴かされ、その際、「さばかり、たへがたう、はづかしかりし事こそ、なかりしか」とのコメントもそっくり伝えられたのかもしれないと述べられている。『宇治拾遺物語』の編者とされる人物には、先祖が直接関わった者名人のエピソードが代々伝えられていて、それらを説話集という形にまとめ上げたということは、充分に考えられることだろう。また『宇治拾遺物語』に登場する人物が世代的に大きなひらきがあるのは、その編纂の際に、編者自身が見聞きしたエピソードもさらに採り入れたためであるとも考えられる。また、『宇治拾遺物語』の編者が予め『古事談』を知っていて、編者の家に伝承されてきた話と異なっていたのが、この、定頼が小式部内侍のもとに通って来た折の先客が誰であったのかということであり、編者は、自家に伝えられてきた話（先客は教通であるとしている）の方が真実であると見なして、あえてこのエピソードを『宇治拾遺物語』の中に採り入れたのではないだろうかとも指摘されている。

これらを念頭におくとしても、さらに、『古事談』が、定頼が訪ねて来た折りの先客が頼宗だったとしている理由も考える必要があるだろう。[7]『今鏡』ふぢなみの下第六によると、

和哥のみちむかしにもはぢずをはしき。哥よみはつらゆき。かねもり。堀川のおほゐ殿。千載の一遇とかやある人侍けると申いだしたる。ひとはえきゝ侍らず。御集にもすぐれたる哥おほくきこゑ。撰集にもあまたいり給へり。

と、頼宗の和歌は高い評価をされている。また、『八雲御抄』用意部には、「堀河右大臣、公任のあとをつぎて、我ひとりと思へり」という記述も見え、[8]頼宗がこのような意識を持っていたと伝えられていたとすれば、あの場で公任の子定頼に出会った時の気まずさなどの、興味深い展開が一番期待できる人物として、先客は頼宗であると考えられたのかも知れない。但し、『古事談』が勝手に説話を改変するということは考え難いので、この話はおそらく『古事談』に行き着く以前の段階で頼宗に付会されていたものだろう。

3

次に、『宇治拾遺物語』に見られる、小式部内侍と教通が一緒に登場するエピソードである第八一話「大二条殿ニ小式部内侍、奉歌読懸事」を取りあげる。本文は次のとおりである。

是も今は昔、大二条殿、小式部内侍おぼしけるが、たえまがちになりける比、例ならぬ事おはしまして、久しう成て、よろしくなり給て、上東門院へ参らせ給たるに、小式部、台盤所に居たりけるに、出させ給とて、「死なんとせしは。など問はざりしぞ」と仰られて過給ける。

御直衣のすそを引とゞめつゝ、申けり。

死ぬばかり歎にこそ歎きしかいきてとふべき身にしあらねば

堪へずおぼしけるにや、かきいだきて、局へおはしまして、寝させ給にけり。

小式部内侍と教通が出会い、そして小式部内侍が亡くなるまでのおよそ十年間に、死にそうなほどの思いをし、またそれだけ長い療養期間を必要とした病気を教通はしているのだろうか。教通の病気については、『御堂関白記』の中に二箇所見出すことができるようである。一つは長和四年八月十九日の記事であり、もう一つは四年後の寛仁二年九月十一日の記事である。[9] このうち、後者の寛仁二年九月十一日の記事では、

庚午、入夜従中宮女方退出、亥時許大將忽重悩者、遣人令問、従此夕悩侍数吐、只今如例侍者、

とあり、わずか数時間で回復していることになる。一方、前者の十九日の記述は、

十九日、丙申、参太内、左衛門督悩霍乱

というものであるが、果してこの時教通はどのくらいの期間療養していたのであろうか。長和四年の出来事を記録しているこの『御堂関白記』や『小右記』から、この前後の教通に関する記事を確認してみたい。[10] 十九日の霍乱から約十日後にあたる二十八日の『御堂関白記』『小右記』のいずれの記事にも教通が再び登場している。

廿八日、乙巳、到桂家、女方相共也、中宮太夫・四条大納言・権大納言、源中納言、左衛門督・権中納言・新中納言、宰相中將・左大弁・三位中將・藤宰相・右大弁等、殿上人十餘人来、入夜還、此次諸國申請定雑事、右大弁領初定、然左大弁奉仕直物、仍書之、

（『御堂関白記』）

廿九日丙午　資平云、昨日左府随身北方、車二両、被向桂山家、大納言道綱、頼通、公任、中納言俊賢、教通、頼宗、經房、参議道方、三位中將能信、参議公信朝臣等相従、雲上人等同追従、殿上人已上讀和哥、

（『小右記』）

『御堂関白記』で、道長が記した教通の霍乱というのは、あくまでもその知らせを受けた日なのであり、その日に病気になったとは限らない。そこで、教通が公の場に姿を現さなくなったのはいつ頃であるかを、これらの文献の、「霍乱」と記された日以前にさかのぼってみると、『小右記』の同年七月二十二日に見出すことができる。

廿二日己巳　昨日戌剋左大臣参内、進退不調、仍乗車、於陣下々之、子息両納言頼通、教通、相扶入陣之間、不秉燭被参御前、両卿猶扶、甚不便也、亥剋許退出、是蔵人登任密談、頭中將資平云、光源法師之事、式部卿宮被傳奏、即召山座主令問給、奏狂亂令申之由云々、光源者座主弟子也、

つまり、教通は七月二十二日から八月二十八日までの一カ月以上もの間『御堂関白記』や『小右記』から姿を消していることになる。しかも『小右記』のこの約一カ月の前後には、かなり頻繁に教通の名を見ることができるのである。してみると、教通の病気は、もしかすると一カ月近い長患いであったかもしれず、『宇治拾遺物語』にある、「久しう成て」や「死なんとせしは」などといった表現がまさに相応しいという可能性がある。教通についての『宇治拾遺物語』の記述に信憑性があるとすれば、はじめにとりあげた第三五話にしても、『古事談』の頼宗より、『宇治拾遺物語』の教通の方が正しい可能性はより高くなるのではないだろうか。

ところで、『宇治拾遺物語』第八一話の小式部内侍の話は、「後拾遺和歌集」第十七雑三に次のようにある。

二条のさきのおほいまうちぎみ日ごろ煩ひて、おこたりてのち、など問はざりつるぞといひ侍りければよめる　小式部内侍

死ぬばかりなげきにこそはなげきしか生きてとふべき身にしあらねば

また、『袋草子』上巻にも次のように見ることができる。(11)

又大二條殿、小式部内侍をおぼす比、日來は御所勞にて久しく有て平癒して参二上東門院一給。小式部内侍大盤所祗候。令レ出給とて、死ムとせしになど不レ問ぞと被レ仰て過給を引留て申ける、

しぬばかり歎にこそは歎しかいきてとふべき身にしあらねば

不レ堪二感情。かきいだきてつぼねにおはして懐抱と云々。

しかし、このいずれも『宇治拾遺物語』のエピソードほど情景を如実に伝えてはいない。『後拾遺和歌集』や『袋草子』とは異なる『宇治拾遺物語』独自の伝承径路があると考えてよいのではないだろうか。

4

ところで、『小右記』や『栄華物語』によれば、教通の病気からしばらくした十一月十七日に、上東門院彰子の女房として仕えていた能通の妹が頼通の子を儲けるが、子を生むと同時に亡くなってしまう。(12)『栄華物語』を引用して紹介しておくと次のとおりである。

又大宮に、山井の四の君といふ人参りたりしを、この

大將物など時〳〵宣はせける。たゞならぬさまになりにければ、「いかにも〳〵さだにもあらば、いかに嬉しく」などおぼされけるに、今はその程になりて、出で居ていみじく祈などし、殿も物など遺して、いとよき事におぼし掟させ給に、そのけしきありて、よろづ騒ぎける程に、「兒は生れ給て、母はうせぬ」との、しる。「あはれなる事かな」とおぼし宣はせける程に、君は、男に在しければ、「嬉しくも」などおぼしける程に、三日ばかりありて、それもうせにけり。母いみじう老いて、多く子生み失ふ中に、この度の事を「いみじう、増すことなし」と思けり。「大將どの、御有様、かやうにて、御子のざ在しますまじきにや」とぞ、人々聞えさすめる。

頼通の権力もさることながら、頼通の姉彰子の子、敦成親王が翌年後一条天皇に即位するなど、栄華を極める一族との間を結ぶこの出産に対して南家の期待はどれほどのものであったろう。さらに、この女性（山の井の四の君とされている）の死からわずか数日後に、期待をかけられたその男の子も亡くなるのである。

南家の中で能通はとりわけこの道長一家とは親しく、先に述べたように、教通の後見であるかたわら、現代思潮社『古事談』の頭注や、新潮日本古典集成『古今著聞集』の頭注によれば、敦成親王家の別当でもあったことが知られる。南家は、道長一家との交流を頼通と教通のいずれの側に重点を置くかという時に、山の井の四の君とその子という頼通とのつながりが絶たれたことは重大な意味を持っていただろう。その結果、能通が後見であるということから、教通との関係がより深まったのではないかと考えられる。

また、これらの出来事は、教通の病気の回復からまだ日が浅いことからして、ちょうどこの頃上東門院を訪ね、小式部内侍に会ったということなのかも知れない。さらに、これらの出来事によってより交流の深まった能通に病後初めて恋人に会ったことを語ってきかせたエピソードがこの第八一話なのではないだろうかという推測も可能かも知れない。

南家貞嗣流能通と教通の関係がいかに親密であるかということ、今まで述べた通りだが、『宇治拾遺物語』の中に登場する小式部内侍像は、もしかしたら教通の目から見た小式部内侍ということになるのかも知れない。

小式部内侍のエピソードには、非現実的と思われるものが多い。『十訓抄』「古今著聞集」また「沙石集」に見られる、病気で苦しむ小式部内侍が和泉式部に歌を詠んだとたんに天井から賛美の声が上がり病気が治るエピソードがある。そして、『今物語』には、教通に長い間会えずにいたある夕暮れに、桜の木が教通に姿を変えて小式部内侍のもとに訪ねてきたというエピソードがある。このように、神秘的なイメージを抱かれる小式部内侍だが、日常生活の様子を見せるこの『宇治拾遺物語』はこれらとは趣を異にしているということができるだろう。これこそ宇治拾遺物語編者の家に伝わった実在の人物としての小式部内侍の姿であり、『宇治拾遺物語』だけに見られる説話の伝承の様子が伺えるのではないだろうか。

注

(1) 『無名草子』（新潮古典集成）による。

(2) 『宝物集』（古典文庫二八三、一九七一年）底本は光長寺本（巻一のみの零本）による。

(3) 『後拾遺和歌集』（岩波書店、新日本古典文学大系、一九九〇年）による。

(4) 『宇治拾遺物語』の説話番号、題名、引用は全て岩波書店、新日本古典文学大系、一九九〇年による。また、『古事談』は吉川弘文館、新訂増補国史大系、一九六五年による。

(5) 「古事談鑑賞（一～十一）」解釈と鑑賞、昭和四十年五月～四十一年四月。

(6) 薗部幹生氏「宇治拾遺物語編者考――南家貞嗣流経範を擬す――」（駒澤国文二十六号、一九八八年）による。

(7) 『今鏡』（吉川弘文館、新訂増補国史大系、一九六五年）による。

(8) 『八雲御抄』（風間書房、日本歌学大系第三巻、一九五六年）による。

(9) 『御堂関白記』（下巻、岩波書店、大日本古記録、一九五四年）による。

(10) 『小右記』（三巻、臨川書店、増補史料大成、一九五六年）による。

(11) 『袋草子』（風間書房、日本歌学大系第三巻、一九五六年）による。

(12) 『栄華物語』（岩波書店、日本古典文学大系、一九六五年）による。

付記

本稿は、国文演習Ⅱの授業の中で、説話文学を研究した際に、小式部内侍に焦点をあて、調べを進めたものである。未熟な点も多いことと思うが、短期大学の学問の結果として形にしておきたかった。多くのご指導をお願いしたい。